

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状

濱 修

1. はじめに

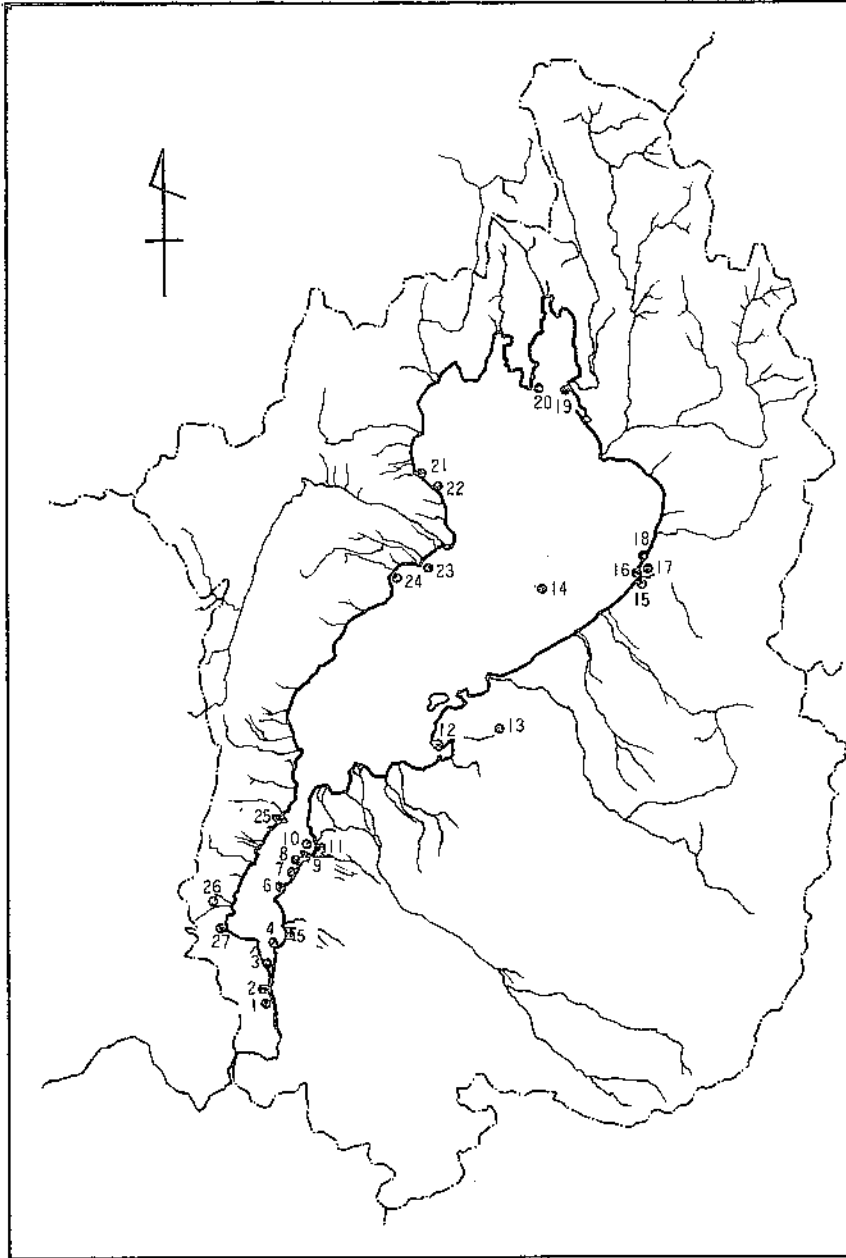
琵琶湖総合開発に伴って、昭和48年より本格的に開始された琵琶湖の湖底の遺跡調査は、今日総合開発がおお詰めの段階となって、その全体像がおぼろげながら明らかになってきた。本論では、これまでの琵琶湖湖底遺跡研究の成果に学び、感ずる所をまとめ、今後の調査の一助としてみたい。

琵琶湖の湖底から土器や石器が見つかることは、江戸時代より知られており、天明年間、現在の草津市山田の住人であった木内石亭は「天明三年四月一日、下笠七条浦にて漁網にかかり拾得せり。(石剣四寸六部)」と『雲根志』に著したとする。この七条浦遺跡は昭和58年度の発掘調査で弥生時代の遺跡が出現し、木内石亭の先見制に驚かされた。

大正13年には湖北町の葛籠尾崎の湖底より尾上の漁師により湖底から引き上げられた土器は、島田貞彦氏の『有史以前の近江』にまとめられ、葛籠尾崎のほか、志那中、瀬田川河底、烏丸崎、沖島、豊公園の湖底遺跡からの出土遺物が紹介された。葛籠尾崎はその後、小江慶雄氏を中心に学術調査が行なわれ、現在も湖北町教育委員会を中心に分布調査が続けられている。また、昭和24年には安土弁天島では、水面下1.77m前後で縄文早期から前期にかけての土器などが発見されている。また、昭和27年には瀬田川入口の粟津湖底で、藤岡謙二郎氏が縄文時代前期から中期にかけての貝塚を発見し、これも水面下約2.25mに貝層が存在するとした。さらに、旧内湖では、戦前から戦後にかけて多くの遺物が発見されている。旧入江内湖の干拓で多くの土器や石器が収集されているし、また、昭和39年には大中の湖の干拓に伴って大中の湖南遺跡が発見され、これも、水面下約1.3mで弥生時代の集落や水田跡がみつまっている。同じく、水荃内湖の干拓地でも縄文時代後期の土器とともに丸木舟が5隻発見されている。

その後、琵琶湖総合開発が計画され、水位の低下は最大1.5mとなることから、湖岸周辺の多くの湖底遺跡の存在が危ぶまれるため、昭和48年滋賀県教育委員会により第一回の湖岸・湖底の分布調査⁽¹⁾が行なわれ、湖底遺跡は66カ所に及んだ。その後の総合開発に伴う事前の発掘調査では、湖西の森浜遺跡、浮御堂遺跡、湖北の尾上遺跡、湖東では多景島湖底遺跡、長命寺湖底遺跡、湖南では赤野井湾遺跡、志那湖底遺跡など多くの遺跡や遺構が新たに発見された。現在、旧内湖、瀬田川を含め湖底遺跡と呼ばれるものは100カ所⁽²⁾をこえている。

水中遺跡の調査の方法も進展した。昭和55年文化庁の「水中遺跡の調査⁽³⁾」以来、潜水による水中での調査は、京都市埋蔵文化財研究所の田辺昭三氏を中心とするグループなどによりその基礎が作られ、現在は滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会の手で行なわれている。また、この潜水による試掘調査をもとに、琵琶湖の沖合数百mもある遺跡でも鋼矢板二重締切によりドライ



1. 石山貝塚
2. 螢谷遺跡
3. 粟津貝塚
4. 矢橋湖底遺跡
5. 北堂遺跡
6. 七条浦遺跡
7. 志那湖底遺跡
8. 津田江湖底遺跡
9. 烏丸崎遺跡
10. 赤野井湾遺跡
11. 小津浜遺跡
12. 長命寺湖底遺跡
13. 大中の湖南遺跡
14. 多景島湖底遺跡
15. 松原内湖遺跡
16. 磯山城遺跡
17. 人江内湖遺跡
18. 筑摩湖岸遺跡
19. 尾上遺跡
20. 葛籠尾崎湖底遺跡
21. 森浜遺跡
22. 針江浜遺跡
23. 三ッ矢千軒
24. 大溝湖底遺跡
25. 浮御堂遺跡
26. 滋賀里遺跡
27. 中保町遺跡

主要湖底・湖岸遺跡平面分布図

化して、湖底を陸上と変わらない方法で調査できるようになるなどの成果を生んでいる。

2. 湖底遺跡の性格

これらの成果から、湖底遺跡とは何かを考えてみたい。

湖底遺跡とは何かという問題はこれまでさまざまな人々により定義され論議されてきたが、ここでは、「現在の琵琶湖の平均水位より低位置あるもの」と総括しておく。そして、葛籠尾崎のように深水位に位置するものと、4～5mの比較的低水位に位置するものとに区分するに止める。これは多くの湖底遺跡が水位の変動によって、当時陸化していたものが、現在はなんらかの原因で水没しているにすぎないからである。

遺跡が立地する環境では、瀬田川川底・川岸に位置する遺跡が数例、大中の湖や入江内湖など旧内湖や今の内湖周辺にある遺跡が約2割、その他多くの遺跡はいわゆる湖岸周辺から沖合500m前後に位置する遺跡である。

湖岸周辺に立地する遺跡では、志那湖底遺跡の縄文晩期の土器棺墓や、大中の湖南遺跡のように砂州上に位置する遺跡、赤野井湾遺跡や、津田江湖底遺跡、入江内湖遺跡の縄文遺跡に特徴的な、低湿地の泥炭層か、分解の進んだ黒褐色土層に立地する遺跡がある。砂州上に立地するものは、旧内湖を閉鎖した浜堤上の高まりに立地するものもある。米原町の筑摩湖底遺跡は、旧入江内湖と琵琶湖を閉鎖した高まりに8～9世紀の遺物が出土し、筑摩の御厨でないかと推定⁽⁴⁾されている。

湖底遺跡の立地を現在の水深の関係でみると、2種類に分類できる。一つには水深数10m以上の葛籠尾崎湖底遺跡であり、第二には水深5m前後までに立地する遺跡で、そのほとんどがこれに含まれる。大津市螢谷の瀬田川川底では縄文早期の押型文土器が出土する地点が79.95m、多景島湖底遺跡では平安時代の土器が79.26mから出土している。また、水面下4m前後で遺構が検出されている遺跡では、赤野井湾遺跡の縄文早期の集石遺構⁽⁵⁾が80.80m、多景島湖底遺跡⁽⁶⁾では80.50mで古墳時代の炉跡と思われる焼土などがある。

また、時代別では旧石器時代が数例、縄文・弥生時代の遺跡がそれぞれ50近くあり、古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代の遺跡もそれぞれ30前後分布する。しかし、平安時代以降の遺跡は鎌倉から室町・江戸時代にかけてそれぞれ2～3遺跡と激減する。これは、琵琶湖の水位の変動と湖底遺跡の成立を考えるうえで重要な意味がありそうだ。

地域別では湖北地域が全体の3分の1、湖東・湖南が4分の1、湖西がもっとも少なく1割強である。これも、湖底遺跡の成立となんらかの関係があるものと思われる。

次に、遺構の内容であるが、散布地が全体の6割を占めて、集落跡が約2割、その他、中・近世の寺社、城跡、千軒伝承、港跡などがある。千軒伝承は、湖西の舟木千軒、三矢千軒、湖北の阿曾津千軒など数カ所がある。これらの実態はいずれも明確でないが、湖西地域には江戸時代初期の寛文2年(1662)の大地震によって水没したと推定されるものもある。

その他、明確な遺構では集落、貝塚、墓、土壘など数カ所がある。

3. 湖底遺跡のもつ問題

このような湖底遺跡の概観から、湖底遺跡のもつ問題点を考えてみたい。

赤野井湾遺跡は守山市赤野井地先の赤野井湾の湖底に位置し、縄文時代から奈良、平安時代にかけての遺物が出土している。1983年度の潜水による試掘調査で、湾内全域で遺物が出土したた

め、1986年に湾南部の烏丸崎から約200m沖合で、ドライ化にした約2000㎡の調査区で、水面下約3.5mの80.80m付近で、アカホヤ火山灰層の下から、縄文時代早期末の土器を含む集石遺構と土壌などが発見された。この集石遺構は直径2mくらいの円形で、集石炉とみなされている。この遺跡のもつ意義は、水面下3.5mで人間が生活していた遺構が検出されたことであり、縄文時代早期末の約6500年前後には、この土地が陸化していたことである。この地域だけが陥没したことは考えにくいから、当時の汀線はこれよりも更に50cm～1m低いと考えられ、BSL-4.5m前後まで水位が下がる。南湖の湖底地形図では、琵琶湖大橋から湖西の柳ヶ崎沖に水深5mの等深線が幅1km弱で帯状に延びているが当時の南湖は、この等深線にそって瀬田川の連続として、琵琶湖大橋の周辺にまで延びていたものと思われる。

また、この赤野井湾は南に、草津市の烏丸崎があるが、この半島の先端から付根までには弥生時代中期の玉作工房や方形周溝墓、弥生時代前期の土壌や溝などが検出⁽⁹⁾されており、また半島の北側では縄文時代晩期の土器も出土している。弥生時代の遺構は83.50m前後に位置しているが、更に下層では¹⁴C年代で縄文時代中期や前期を示す黒土層が堆積している。

4. 広域火山灰と遺跡の推移

赤野井湾の等深図では、この半島から北に広がるように深度が深くなっており、また、湾内の分布調査に於いても、半島寄りの南東部を中心に粘土層や泥土層が分布し、更にアカホヤ火山灰も湾東岸から南東部の、等深線-1.7mまでの範囲に分布する。しかし、湾の北から北西にかけての沖合では、砂礫層が中心でアカホヤ火山灰は検出されない。こうしたことから、赤野井湾の縄文時代早期の旧地形は烏丸崎にかけての南半が離水し、縄文人の生活の場となっていたと思われる。

次に、縄文時代早期の代表的な遺跡には、全国的にも有名な、大津市石山の瀬田川右岸の低段丘に形成されている石山貝塚がある。石山貝塚は縄文時代早期のタイプサイトとして、また、近江と東海地方の土器形式の交流という点でも重要な遺跡である。石山貝塚は戦前よりたびたび学術調査の手が加えられ、1956年には平安学園考古学クラブの『石山貝塚概説』として報告されている。石山貝塚は近江の縄文早期末の土器編年を確立しただけでなく、当時の遺跡周辺での古環境復元も試みている。

貝塚底部の泥砂中の鉄分含有量から、今の川底よりも3.75m低く、貝塚の表面は標高87.50mで貝塚の下層の黒土層は標高85.50mを示し、この層は現在の瀬田川の川岸から西へ26.50m東へ170mの地点にまで確認された。そこから標高90mラインで琵琶湖を図示して当時の汀線を復元した。

更に、石山貝塚の生成についても「押型文土器の時代に始まり、入海式の時期に最高潮に達し、石山式をもって消滅する」とし、その原因の一端を「瀬田川下流の鹿跳付近の川底の低下で水位の減少による魚貝類の著しい滅亡のためである」とした。

これは、戦後間もない混乱期にあって、考古学・自然科学者が協力しあい当時の古環境を復元した面期的な報告書であった。

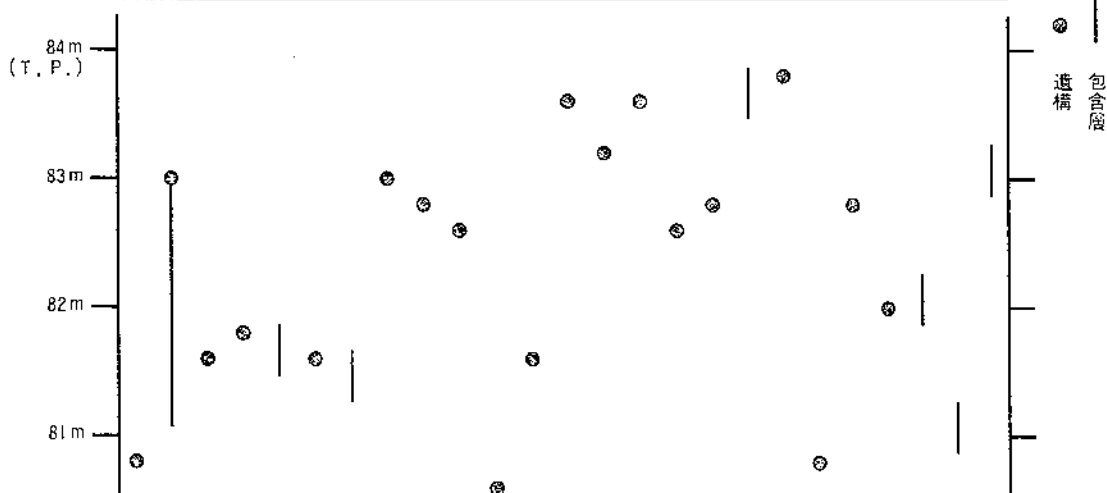
その後、この石山貝塚の旧汀線論は多くの支持をうるところとなり、現在でも決定的な結論が

でないまま、琵琶湖の水位変動の有り方に問題をなげかけている。これは、琵琶湖の全体の水位の変化と、湖底遺跡全体にかかわる問題であり、後に再考してみたい。ここでは石山貝塚の消滅の原因について、赤野井湾遺跡の縄文早期の集石遺構との関連を考えてみたい。

赤野井湾遺跡の集石を中心とした遺構群の土器は、縄文時代早期末の粕畑式から石山式・天神山式にかけて出土し、条痕文系がそのピークをなしているという⁽⁶⁾。この遺跡で注目すべき点は、この遺構の包含層の上面に「アカホヤ火山灰」が覆っていたことである。このアカホヤ火山灰は、鹿児島県硫黄島付近の鬼界カルデラから約6300年前に噴火した広域火山灰である。

近年、近畿地方においても、遺跡調査において火山灰の存在が注目され始めている。近畿地方は火山活動が少なかったため、火山灰の検出はまれであるが、南九州では噴火時の火砕流や火山灰が多い所で数十mも堆積し、いわゆるシラス台地を形成している。こうした南九州の火山灰が近畿から関東、東北にかけて広く分布していることがわかったのは10年ほど前⁽⁹⁾である。滋賀県では京都大学の琵琶湖ボーリングで約100種類の火山灰が確認されており、また、遺跡調査の関連では約22000年前のA・T火山灰、約17000年前のホーキ火山灰、約9300年前の隠岐火山灰、約6300年前のアカホヤ火山灰などが知られている。

湖底遺跡垂直分布図	縄文時代										弥生時代			古墳時代		飛鳥	奈良	平安時代							
	早		前		中		後		晩		前	中	後												
	赤野井湾遺跡	磯山城遺跡	津田江湖底遺跡	粟津貝塚	赤野井湾遺跡	赤野井湾遺跡	志那湖底遺跡	松原内湖遺跡	長命寺湖底遺跡	志那湖底遺跡	大溝湖底遺跡	針江浜湖底遺跡	小津浜遺跡	大中の湖南遺跡	烏丸崎遺跡	赤野井湾遺跡	森浜遺跡	入江内湖遺跡	赤野井湾遺跡	多景島湖底遺跡	赤野井湾遺跡	尾上遺跡	浮御堂遺跡	登谷遺跡	筑摩湖岸遺跡
	集石炉	人骨含層	土壙	貝塚	包含層	土壙	包含層	土壙	丸木舟	喪棺墓	埋没林	埋没林	集落	集落	方冢形墓周	流路	土壙	木器	土壙	炉跡	瓦群	集石	包含層	包含層	包含層



福井県の鳥浜貝塚では約9300年前の隠岐火山灰を間層として上・下層から縄文早期の押型文土器が出土し、更に、縄文時代前期の上ノ山Z式の土器を含む層には約6300年前のアカホヤ火山灰が検出されている。

県下では、京大の琵琶湖深層ボーリングなどのほかに、1982年草津市御倉遺跡周辺で、自然地理関係者によるボーリング調査の結果、A・T火山灰とホーキ火山灰が検出され、また、南湖の矢橋から瀬田川河口にかけてのA・T火山灰と泥炭層の分布から古環境の復元もされている⁽¹⁰⁾。また、1984年の米原町教育委員会の調査による、磯山城遺跡⁽¹¹⁾では、縄文時代早期末から前期初頭にかけての埋葬人骨が2体検出された。この人骨に付着した土壌からA・T、B B51、アカホヤの3種類の火山灰が検出され、共伴した土器とともに、人骨埋葬の時期をアカホヤ火山灰降下後の、縄文時代早期末から前期初頭の時期とした。また、先にも述べたように赤野井湾遺跡では、縄文時代早期末の遺構の上にアカホヤ火山灰が検出されている。

今後、鍵層となる火山灰に着目した調査の数は近畿地方でも増加することだろう。

次に、このような広域火山灰と遺跡の存亡について考えてみたい。約6300年前といわれるアカホヤ火山灰は、南九州を中心に近畿から関東、東北まで広く分布している。南九州ではこの鬼界カルデラの噴火で、大規模で壊滅的に自然環境が破壊され、火山灰は長く空を蔽い、太陽の光を遮断したことだろう。自然に依存していた縄文人には、打撃的な現象であったと思われる。土器形式ではアカホヤ直下には塞ノ神式があり、直後には蕨式土器が出現して、土器形成でも文化的にもアカホヤ前後で大きな相違があるとされる⁽¹²⁾。

赤野井湾遺跡や石山貝塚が縄文時代早期末の石山式・天神山式土器の時代をもって突然消滅する原因は、このアカホヤ火山灰に重要な要因があったのではなかろうか。

更に、縄文時代早・前期の様相を、近江と関係の深い東海地方の西部についてみてみたい。東海地方西部の縄文早期末の土器編年⁽¹³⁾では、八ツ崎I式→粕畑式→上ノ山式→入海I式→入海II式→石山式→塩屋中層式→天神山式→塩屋式とされている。また、石山貝塚では、押型文→穂谷式→茅山式→粕畑式→上ノ山式→入海I式→入海II式→石山式とする土器編年がなされている。山下勝年氏は、「知多半島の二股貝塚や入海貝塚などが石山貝塚と同時期に貝塚の形成を終え、また、天神山式に続く塩屋式の土器はその分布範囲や出土状況からみても両者には大きな差がある。」と述べ、更に、「東海地方の早期末の遺跡群は、天神山式に続く塩屋式の段階で貝塚の形成を終えるか、廃絶する。」としている。そこで、東海地方のアカホヤ火山灰の降灰は、天神山土器の段階であるとしている⁽¹³⁾。

また、東海地方の土器形式と関係の深い米原町の磯山城遺跡から出土した埋葬施設S X Iは2体の屈葬人骨であるが、このS X Iに伴う土器は縄文時代早期の高山寺式から鶺鴒台式、茅山式、八ツ崎I式、粕畑式、入海II式、石山式、条痕文、塩屋式が出土している。これらから、屈葬の時期は土器編年上もっとも新しい塩屋式の段階であり、縄文早期から前期初頭としている。また、この人骨に付着していた粘土の火山ガラスの分析から、約22000年前のA・T、約17000年前のB B51、約6300年前のアカホヤの火山灰が検出されたが、この中でもっとも新しいものはアカホヤ火山灰である。S X Iはアカホヤ火山灰を付着させ、共伴するもっとも新しい土器が縄文早期末・

前期初頭の塩屋式の段階であるから、アカホヤ降灰は東海地方の土器編年で塩屋式かそれ以前の天神山の段階になる。

これは、赤野井湾遺跡の天神山式土器を含む包含層を蔽うアカホヤ火山灰層の検出と考えあわせると、アカホヤ火山灰は天神山式以降塩屋式以前に降灰したことになる。

石山貝塚の消滅や、赤野井湾遺跡の縄文早期末の遺構群の消滅などの直接の原因は、琵琶湖の水位変動もあるが、このアカホヤ火山灰の降灰がより直接的ではなかろうか。

それでは、縄文時代早期末に消滅した石山貝塚や赤野井湾遺跡の縄文人はどこに移住したのであろうか。

縄文時代前期の遺跡は、県下においても出土例は少ない。南湖周辺でみると、粟津貝塚、螢谷、北大津、矢橋湖底、北萱、津田江湖底などの遺跡がある。湖東では大中の湖周辺の地域、湖北では磯山城、高溝、宮司、葛籠尾崎湖底などの遺跡である。

現在、遺構に伴う出土例は螢谷貝塚、粟津貝塚、津田江湖底遺跡などわずかしかないがこれらの遺跡について検討してみたい。

螢谷貝塚は出土遺物も少なく時期的にも短期ではあるが、縄文時代早期から前期の一時的な遺構であったものと思われる。しかし、昭和59年度の螢谷貝塚前の瀬田川川底における発掘調査⁽¹⁴⁾では、旧石器時代のナイフ形石器から、縄文早期の押型文土器、早期末・前期初頭を中心とした土器群などが出土していることから、周辺にそれらの遺構が存在するものと思われる。押型文土器は、近畿地方の大川式・神宮寺式と中部地方の樋沢式などの中間的な土器が出土している。早期末・前期初頭の土器群で注目すべき点は、粟津貝塚でもみられる「押しき文」土器の出土である。今後の詳しい整理で更に明らかになるう。

粟津貝塚は昭和27年の藤岡氏のボーリング等による調査で全国唯一の湖中貝塚で、かつて陸地にあったものが「徐々にたる地盤の沈降に伴う湖岸の後退を想定⁽¹⁵⁾」とされた。調査の結果は、貝塚の範囲が東西約40m、南北約100mでやや馬蹄形に分布し、出土する土器には縄文時代前期末から中期の船元式や北陸系の土器であった。また、貝層の標高は83.744m (O・P) であるとした。

その後、昭和55年には、文化庁が京都市埋蔵文化財研究所に委託し、田辺昭三氏を中心に潜水による記録調査が行われた。貝層の範囲は東西幅49m、南北95mで、基本土層は淡黄色砂礫層、貝層、黒褐色腐植土であり、この貝層には縄文時代前期末から中期の土器、動物遺体、植物遺体が多く含まれていたとする。しかし、貝層の絶対高が明記されず「深い所で水面から1.1~1.3、大半は水深1.8~2mの深さ」と表現するにとどまり、湖底貝塚の成立説明にまでにはいたらなかったが、その後の湖底遺跡調査の先駆をなし「陸上の精度を水中へ」のスローガン⁽¹⁶⁾は現在も生きている。

昭和58年から59年にかけての滋賀県教育委員会の分布調査⁽¹⁷⁾において、貝層の範囲は東西190m、南北230mに広がり、出土する遺物は土器、動物遺体、植物遺体などが水中のため非常によく残され、また、土器の時代幅も縄文時代早期の押型文~早期末・前期初頭~中期船元式まで長期間続くことがわかった。また貝殻の¹⁴C年代測定では3570±80 B Pで、更に下層の砂層は4920±160 B Pの年代値が示され⁽¹⁸⁾、貝塚の基底面は安定したところで標高81.87~81.20mを測るとし

た。

今後、発掘調査の機会があればその全貌は明らかになるだろうが、これまでの試掘調査や、分布調査では、水中に位置する貝塚のため、全体の貝塚の範囲や、貝層の絶対高、時期幅等不明確な点も多い。

しかし、湖底遺跡成立の重要な鍵をもつこの遺跡の意義は高い。第一に立地であるが、貝層の標高が81.50~82.00m前後で、瀬田川東岸の大江地先からゆるやかに西に傾斜する微高地上に立地し、西端は深く長い谷が南北に形成されている。これは、当時の瀬田川が粟津貝塚の西側を流れ、現在の粟津中学付近を流下していたといわれる。

また、貝塚は標高82.00m前後で西の谷に向け低くなっているとおもわれるが、水深は南湖におけるその他の遺跡の立地からみて矛盾はしない。また、粟津貝塚の時期であるが、出土遺物から縄文時代早期から中期前半までに位置付けられる。

とりわけ、早期末から前期初頭に位置付けられている粟津「SZI群⁽¹⁹⁾」と呼ばれる土器群の時期から遺物の増加がみられる。この「SZI群」土器は、深鉢型土器で外面条痕地の頸部に、竹管状工具による数条の押引きを施すものである。県下では、磯山城遺跡、瀬田川川底の螢谷遺跡などで出土している。粟津貝塚では、この「粟津SZI群」土器の段階から北白川下層・里木・船元式までの遺物が多い。

この早期末前期初頭の「押引き文」土器のは、石山貝塚や赤野井湾遺跡で早期末の遺跡が消滅した後に生まれた新たな土器群である。この「押引き文」土器は瀬戸内から山陰地方まで分布するといわれ、この時期に粟津貝塚や螢谷遺跡に出土することは、早期末まで赤野井湾遺跡や石山貝塚にみられた東海地方との安定的な関係に混乱を生じたことになる。これもアカホヤ火山灰降灰となんらかの関係があったものと思われる。

また、粟津貝塚下層の砂層の¹⁴C年代は、4920±160BPであったが、アカホヤ降灰の6300年よりは新しく、赤野井湾遺跡中層の船元式土器の出土した土層の¹⁴C年代の4490±40BPよりは古くなる。

すなわち、粟津貝塚の形成は縄文時代早期の押型文の時期からではあるが、主要には石山貝塚の消滅したあと、早期末から中期前半の湖南南部の拠点遺跡であったものと思われる。

次に、草津市津田江地先にある津田江湖底遺跡では、昭和61年度の調査⁽²⁰⁾で標高81.50m前後で縄文時代前期の土壌や森林跡が検出され、当時陸化していたことがわかった。

赤野井湾遺跡の縄文早期の遺構を形成した人々は、一時的に湖岸地域を放棄し、新たに縄文前期中頃から、烏丸崎をはさんだ南側の津田江湖岸に移住したものだだろう。その間に、琵琶湖の水位は赤野井湾遺跡の80.80mから津田江湖底遺跡の81.50mに約70cm程度は上昇したと思われる。

このように、現在までの南湖における遺跡の消長は縄文時代早期末の石山貝塚や、赤野井湾の遺跡を形成した人々が、石山→粟津周辺、赤野井湾→津田江湖周辺へと移住したことが推測される。これは、アカホヤ火山灰降灰などを契機としつつ、琵琶湖の水位の増加という環境の変化に対応しながら、定住と移住を繰り返していったのであろう。

このような現象は、縄文時代中期以降においても連続する。

縄文時代中期では赤野井湾遺跡中層や、津田江湖底遺跡に中期前半の遺物が出土し、志那湖底遺跡にも中期後半の遺物が出土している。後期においても、赤野井湾遺跡の法竜川河口では後期前半の良好な土器群が出土しており、また、志那湖底遺跡では後期後半の遺物が検出され、共に、標高81.50m前後で発見⁽²¹⁾されている。晩期においては、志那湖底遺跡の葉山川河口右岸の湖岸から、沖合約300mの砂州状に延びる微高地にかけて、標高82.50m前後で晩期前半の土器棺墓群が出土⁽²²⁾している。

こうしてみると、南湖東岸から瀬田川河口にかけての縄文時代の遺跡の変遷は、縄文早期の押型土土器が、(a)赤野井湾・(b)矢橋周辺～粟津～螢谷～石山、早期末が、(a)赤野井湾・(b)矢橋周辺～粟津～螢谷～石山、前期では、(a)津田江湾・(b)矢橋周辺～粟津～螢谷、中期になると、(a)赤野井湾～津田江湾～志那湖底・(b)矢橋周辺～粟津～螢谷、後期では、(a)赤野井湾～津田江湾～志那、更に晩期では、(a)赤野井湾～小津浜～烏丸崎～志那・(b)矢橋周辺である。このように(a)・(b)2地域に遺構の集中をみる事ができた。

また、対岸の南湖西岸では後期後半の集落に穴太遺跡、晩期の遺構では滋賀里遺跡の隆盛をみる事ができる。

以上のように、琵琶湖南湖の湖岸を中心とした地域は、縄文時代の各時期とも、地域的な変動を見せながらも、連続と遺跡の形成を続けたのである。

かって、縄文時代中期には伊吹山麓に集落が移動したと考えられていたが、南湖周辺での遺構や遺物の出土は、水位の変化による自然環境の変化のなかでも生活の場を求め生き続けたのである。

こうした事実は、南湖湖岸に限らず、湖東の大中の湖周辺の遺跡群や、松原内湖・入江内湖周辺、湖北の葛籠尾崎、尾上・今西周辺の地域においてもいえることである。琵琶湖の豊かな富を求める人びとの心は、現代人も縄文人も変わりはないのである。

5. 遺跡の移動と水位の変化

次に、南湖周辺の遺跡の移動と、水位の変化について考えてみたい。

縄文時代早期では、守山市赤野井湾遺跡で集石遺構が標高80.80mで検出されている。また、米原町の磯山城遺跡では早期末前期初頭の埋葬人骨が、標高83.00mで出土し、早期の遺物包含層は81.00mまで続いている。瀬田川川床の螢谷遺跡の縄文早期末・前期初頭の遺物包含層は80.70m前後に位置している。しかし、石山貝塚では当時の川底が現在の瀬田川の水面に相当するとし、貝塚表面を海拔87.5mとして、当時の汀線を標高90mとした。

この石山貝塚の汀線論はその後多くの支持を得るところとなり、湖底遺跡の成立を考えるうえでも重要な役割をはたした。

1971年の湖西線関連遺跡⁽²³⁾の調査で発見された滋賀里遺跡は、扇状地状の高まりに縄文時代晩期の甕棺墓群、土壇墓群があり、その北斜面に小貝塚が形成されていた。また、この貝塚形成前にピート層が形成され、一時湿地状態であったことを示していた。滋賀里遺跡は標高90m上に立地

しているが、1885年の測量図、石山貝塚の立地、小字名などから、「近世以降に湖岸線の大幅な後退があった。」とし、縄文時代晩期から近世までの旧汀線を標高90m近くとした。

また、大津京の時代もこれと同様に「琵琶湖の汀線は現在より600～700m陸地側にいりこんでいた」としている⁽²⁴⁾。

こうした南湖西岸遺跡立地は南湖東岸の草津・守山周辺の遺跡立地とは大きく異なっている。

草津から守山にかけての湖岸では、縄文時代早期の集石遺構が80.80m、前期の土壇が81.50m、中期から後期の包含層が81.50～82.00m前後、晩期では滋賀里遺跡と同時期の志那湖底遺跡の土器棺墓が82.50m前後に位置している。滋賀里遺跡の絶対高が明確ではないが、標高90mとすると、志那湖底遺跡とは約7.5m前後の比高差が出てくる。

こうしたギャップは縄文時代のみならず、弥生時代・古墳時代から大津京の時代にもみられる。

弥生時代では、前期から中期にかけての方形周溝墓や住居跡が、草津市の烏丸崎遺跡や守山市の小津浜遺跡⁽²⁵⁾で検出されている。これらの遺構の標高は83.50m前後である。古墳時代の初めにおいても、赤野井湾遺跡ではほぼ同じレベルから土壇などが検出⁽²⁶⁾されている。しかし、赤野井湾遺跡の天神川水門地区⁽²⁷⁾では古墳時代後期になると82.70m前後で多量の木製品を含む溝や、水田址と思われる足跡群が検出されていることからやや水位が低下したものと思われる。また、飛鳥・白鳳時代では、赤野井湾遺跡で7世紀末の瓦群が82.80mで出土している。草津市の湖岸周辺に立地する古代寺院を等高線との関係で分析した藤井朗氏⁽²⁸⁾は、花摘寺廃寺・宝光寺跡など主要な寺院はほぼ標高86m～87mに位置し、その他の草津北部の寺院址の全てが86m～89m以内に立地するとしている。これは、当時の汀線が86mまでであったというのではなく大小の水路を運河のように利用していたものと思われるが、それでも南湖西岸の飛鳥・白鳳時代の標高90mの旧汀線と比較すると1～4mも水面下になる。

南湖西岸での湖底遺跡は極めて限定され、唐崎遺跡や山ノ下遺跡で弥生式土器の散布が認められている程度で、遺跡の性格は不明である。時代が下がって、天正年間の坂本城跡⁽²⁹⁾の石垣は84.50mにあり基底は現在の水面下にある。

だが、大津市の中保町にある中保遺跡⁽³⁰⁾は、昭和40年に井戸掘削中に発見された遺跡で「地表下3～4米にわたり黒色有機質土層があり、以下粗粒砂層となるのであって、弥生式土器は黒色有機質土器層最低位から砂層にわたり包含され、陶質土器、埴質土器は黒色有機質土器層中に存した模様である。」とし、「現地表面より3乃至4米という深位は、ほぼ琵琶湖水面の高さに等しい」としている。この包含層の絶対高は明確ではないが、弥生時代の遺物包含層が黒色有機質土層形成より以前であることは、南湖東岸の様相と類似する。南湖西岸でも83m～84m前後において弥生時代の遺跡が形成されていたのではなかろうか。

あえて、南湖東岸と西岸で数mの比高差で同時に遺跡が存在したと考えるなら、湖西地域隆起し、湖東地域が沈降したことになる。湖西地域の隆起はあまり考えにくい。

湖西には多くの活断層があり、京都と滋賀の境には花折断層、比良山麓に比良断層、堅田断層、比叡山麓に比叡断層等がある。文献に残る県下の地震は数多くあり、文治元年（1185）や寛文2年（1662）等が有名である。現在、湖底遺跡の成立をこれらの古地震に原因があるとする説もあ

る。事実、寛文の地震をはさんで正保2年(1645)と元禄14年(1701)の石高を比べると栗東、滋賀、高嶋三郎の石高が減少し、とくに滋賀郡の石高減少がみられるため、寛文の大地震で湖岸周辺が水没したと考えられて⁽³¹⁾いる。

この寛文の大地震では、比良山地を中心にして隆起し、琵琶湖西岸と三方五湖周辺が沈降した。そのため三方五湖では三方湖の排水路が閉鎖され周辺の村々が水没し、新たな水路を開削した話は有名である。

湖西のいくつかの活断層は比良から比叡山麓を走る。とくに比叡断層は坂本の西教寺周辺から、日吉神社、近江神宮、三井寺にかけての山麓を通る。そしてこの断層をはさんで山側が隆起し、湖岸側が沈降している。そのため、南湖西岸は、全体に沈降状態にあるといえ、近世以降に現在の湖西線より湖岸側が陸化したとは考えにくい。

この地域は等深図にも明らかなように、湖東側の遠浅な地形に比べ湖岸から急激に深くなる。こうした地形的特徴は数万年前のウルム氷期に形成され、その極相期には湖西側に痩せ細った南湖がみられ、縄文前期初めまで続いた。その後、徐々に水位は回復し、平安時代にはほぼ現在の水位か、やや高い地点にまで増加し、増減を繰り返しつつ、現在に到ったものと思われる。

このように、南湖周辺の遺跡の水位は琵琶湖の水位の変動に伴い相対的に変化したのである。このような現象は、琵琶湖全体においても地域的、時代的变化をもちつつ、遺跡の変動と移動を繰り返していったものと思われる。

6. まとめ

琵琶湖は年に1~2mm程度沈降しているといわれ、年1mmとすると縄文時代早期末のアカホヤ火山灰の時期では約6.3m程度沈降したことになる。これは、湖底に遺跡が出現するもっとも古い時期の縄文時代早期末の旧汀線と比較しても、約1m程の差でしかない。このような沈降現象と共に、地震による地域的な陥没なども考えあわせて検討してゆく必要がある。

現在、湖底遺跡成立の決定的要因は明らかではない。自然科学の分野においても、考古学、歴史学の分野においてもそれぞれ独自の研究と分析を行っているものと思われる。今まで、自然科学の立場から古地震、気象変化に伴う降水量の増減、地盤の隆起と沈降、堆積作用など多様な分野からのアプローチが必要とされてきたが、共同研究はおろか、情報交換も十分ではない。

今回は、南湖中心の遺構の検討になったが、常に琵琶湖全体を同レベルで考え、更に、滋賀県全域から全国的視点のなかで検討し、共同で研究してゆくことが重要であろう。

注

- (1) 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会『琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』(1973年)
- (2) 滋賀県教育委員会『昭和60年度—滋賀県遺跡地図』(1986年)
- (3) 文化庁『遺跡確認の調査研究昭和55年度実施報告』(1980年)
- (4) 米原町教育委員会『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』(1986年)
- (5) 財滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.117(1987年)、第22回埋蔵文化財研究会『火

山灰と考古学をめぐる諸問題』(1987年)

- (6) 勸滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.99 (1985年)
- (7) 勸滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.100 (1985年)、滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース』No.86号 No.88号 (1987年)
- (8) 平井美典氏の教示による。
- (9) 町田洋・新井房夫「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ」(『第四紀研究』17 1978年)
- (10) 滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会『瀬田川』(1983年)
- (11) 米原町教育委員会『磯山城遺跡』(1986年)
- (12) 新東晃一「南九州のアカホヤ火山灰と前後の土器型式」(第22回埋蔵文化財研究会『火山灰と考古学をめぐる諸問題』(1987年)
- (13) 山下勝年「東海地方西部におけるアカホヤ火山灰降下の影響とその時期」(『知多古文化研究』3 1987年)
- (14) 勸滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.102 (1985年)
- (15) 藤岡謙二郎『先史地域の変遷史的研究』(1970年)
- (16) 田辺昭三・吉川義彦「琵琶湖の水中遺跡の調査」(『考古学ジャーナル』No.226 1983年)
- (17) 『びわ湖と埋蔵文化財』(水資源開発公団 1984年)
- (18) 丸山竜平「琵琶湖湖底遺跡の調査近況」(『考古学ジャーナル』No.245 1985年)
- (19) 宮本一夫「近畿中国地方の縄文前期初頭の土器細分」(『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和59年度』1987年)
- (20) 勸滋賀県文化財保護協会(『滋賀文化財だより』No.118 1987年)
- (21) 滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会『志那湖底遺跡発掘調査概要報告書—志那北その2工区』(1987年)
- (22) 滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会『志那湖底遺跡発掘調査概要—志那南その2工区』(1987年)
- (23) 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』(1973年)
- (24) 坪井清足編『古代を考える—宮都発掘』(1987年)
- (25) 滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース』No.88号 (1987年) ほか
- (26) 滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース』No.91号 (1987年)
- (27) 滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会『赤野井湾遺跡—天神川水門工区』(1986年)
- (28) 藤居朗「草津の古代寺院」(『滋賀史学会誌』5号 1986年)
- (29) 大津市教育委員会『埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書II』(1987年)
- (30) 西田弘「大津市中保町遺跡」(『滋賀文化財研究所月報』6 1968年)
- (31) 大長昭雄他『古地震』(1982年 東京大学出版会)

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年ではありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241